



よなんぎだより

平成29年9月19日(火) No.3

「明照保育園参観と語る会」報告

7月28日(金)に、明照保育園を会場に、「園参観と語る会」が開催されました。ねらいである「心身ともにたくましく、思いやりのある子ども」のもと、恵まれた環境の中で、子どもたちが目を輝かせて活動に取り組む姿が印象的でした。先生方が、園児一人一人に合った支援をされる様子を参観させていただき、とても勉強になりました。

参加者の声

参観について

- ・子どもたちの自由な発想が大いに引き出されていて、本当に楽しんでいるのが伝わった。(保育園)
- ・小学生が園児と関わる姿を見て驚いた。園児が小学生に対して、親しみと憧れをもつことで、小学校への接続がなめらかなのではないかと思った。(幼稚園)
- ・保育士が声をかけすぎてしまったり、やりすぎてしまったりすることがなく、子どもたちの自主性が育てられていた。プール見学の子どもが先に部屋に戻り、自分たちで電気や扇風機をつける姿を見て、子どもたちができることはたくさんあると改めて感じた。(こども園)
- ・子どもたちが、しっかり話を聞いている姿がすごく印象に残った。先生方の話し方や子どもたちの興味をひくような教材の工夫などが、子どもたちの「聞きたい・知りたい」という思いを引き出しているのだと思った。(小学校)



語る会について

- ・小学校でどうつまずいてしまうのかを聞くことができ、園でどうしているかを伝え合うこともできてよかった。(保育園)
- ・それぞれの園や学校により、方針や環境の違いがあるため、子ども同士のぶつかりや意見も違うと感じた。幼児の頃からの積み重ねが小学校へとつながっていくので、幼児のうちにたくさん経験をしたり、失敗をしたりすることが大切と思った。(幼稚園)
- ・小学校での生活の様子を聞き、園でどのような力をより育てていったらよいか今まで以上に考えることができた。幼・保・園・小・中の教員同士が見通しをもって子どもと関わることで、子ども自身もギャップが少なく過ごしていけるのではないかと感じた。(幼稚園)
- ・「1年生は思っているよりできる」この言葉が衝撃だった。幼稚園・保育園の先生の話聞くことで、1年生への支援を見通すことができた。(小学校)



学習会「一貫性・連続性のある幼年期教育のあり方を探る」 ～アプローチ・スタートカリキュラムの活用～

講師 希望が丘こども園 藤城 民男 園長

<幼児期の教育のねらい>

大きな目標は、

- ・人格形成の基礎を培うこと。
- ・生きる力の基礎を養うこと。

※指導要領の改訂で新たに加わったねらい

- ・「言葉に対する感覚を豊かにする」ことを示し、幼児が「言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などにふれ、これらを使う楽しさを味わえるようにする」という内容が加わった。

<幼児期の教育と児童期の教育の違いは？>

- ・幼児期…園での遊び＝学び（教材）「経験カリキュラム」
- ・児童期…「わかった」「できた」を大切にする授業「教科カリキュラム」

<児童期につなげるため、幼児期でどんな教育をすればよいか？>

- ・視覚的な支援で、子どもの学び（遊び）を支える。←聞いただけではダメ！
- ・言葉で伝えることを大切にする。←文字で伝えることを必要としない。
- ・幼児期は「教えるはいけない」のではなく、児童期とは教え方が違う。

↓ポイントは？

遊びを通して教える。

覚えたいという気持ちに応えるように教える。

幼保中の交流活動

卒業園での家庭科保育実習 ～高豊中学校の実践より～

高豊中学校では、3年生の家庭科の授業の中で学校周辺にある4つの園（豊南保育園、高塚保育園、富士見幼稚園、富士見台幼稚園）で保育実習に取り組んでいます。高豊中学校の多くの生徒はこの4つの園のどこかを卒園しているため、生徒は原則として自分の卒園した園に行って保育実習に取り組みます。

生徒は、自分で手作りしたおもちゃを持参したり、園児とあそびたい遊びを考えて必要なものを持参したりして、

園児とふれ合っています。幼い子どもたちとの関わりに戸惑う姿も見られますが、どの生徒も実習を終えると「楽しかった」と笑顔で学校に戻ってきます。自分の卒園した懐かしい園で過ごすひとときに、生徒はいろいろな人のおかげで今の自分がいることを実感しているようです。

各園の保育士や幼稚園教諭も、成長した生徒に会えることを毎年楽しみにしており、休日のシフトになっていた保育士や幼稚園教諭が生徒に会うために出勤することもあるそうです。

高豊中学校での実践のように、幼保子ども園との連携を深めていく交流活動が行われていくことを願っています。

